DRESDNER PHILHARMONIE

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

ミヒャエル・ザンデルリンク［首席指揮者］
Michael Sanderling, PrincipalConductor

●お客様へお願い●
携帯電話の電源は、開演前に必ずお切りください。
補聴器をご使用の方は、正しく装着されているかご確認ください。

2017年6月25日［日］15:00
所沢市民文化センター　ミューズ　アークホール
MUSE ARK HALL
主催：所沢ミューズ／ジャパン・アーツ

SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie

PROGRAM

◆ブラームス：交響曲第４番 ホ短調 作品 98

Johannes Brahms(1833-1897)：Sinfonie Nr.4 e-moll op.98

第１楽章：アレグロ・ノン・トロッポ

第２楽章：アンダンテ・モデラート

第３楽章：アレグロ・ジョコーソ

第４楽章：アレグロ・エネルジーコ・エ・パッショナート

† † † † † † †

◆ブラームス：交響曲第１番 ハ短調 作品 68

Johannes Brahms(1833-1897)：Sinfonie Nr.1 c-moll op.68

第１楽章：ウン・ポーコ・ソステヌート／アレグロ

第２楽章：アンダンテ・ソステヌート

第３楽章：ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ

第４楽章：アダージョ／ピウ・アンダンテ／アレグロ・マ・ノン・トロッポ

PROGRAM NOTES

◆ブラームス：交響曲第４番 ホ短調 作品 98

ブラームスの写真[1883 年頃]

20 年もの歳月をかけて完成した交響曲第１番、美しいペルチャッハ湖畔で完成され「ブラームスの田園」と評される第２番、ハンス・リヒターの指揮により空前の大成功をおさめた第３番。続く第４番は 1884 年から翌年にかけての夏の休暇に、ウィーン南西の街ミュルツツーシュラークで書き上げられ、これがブラームス最後の交響曲となった。

第４番の作曲に際し、ブラームスは対立するワーグナー派（ワーグナー自身は既に 1883 年に没していたが）の妨害や中傷を警戒し、完全なまでの秘密主義を貫き、親しい友人たちにさえ詳しい作曲状況を隠し続けた。1885 年、夏の休暇を終えたブラームスは、10 月 8 日になってようやくウィーンの自宅に友人を招き新しい交響曲の２台のピアノ編曲版を披露した。試弾に立ち会った批評家のハンスリックやカルベック、指揮者のリヒターなどの反応は様々であったが、古風な教会旋法を用いた第２楽章やバロック時代のパッサカリアの形式（低音の主題に基づく変奏曲）を用いた終楽章など、作曲技巧が複雑すぎ一般の聴衆が理解できるか懸念する声が多かったという。大幅に改訂した方がいいという意見もあったが、ブラームスは当初の構想を変更せず、同年 10 月 25 日マイニンゲン宮廷楽団、ブラームス自身の指揮によりついに初演を迎えた。

マイニンゲン公ゲオルク２世はブラームスの良き理解者であり、ブラームスはオーケストラと十分なリハーサルを重ねることができたこともあり、友人たちの心配をよそに交響曲第４番は好評をもって迎えられた。楽章が終わるごとに長い拍手が起こり、特に第３楽章はその場ですぐにアンコールされ

SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie

るほどであった。冒頭の８つの音は音高を無視すれば「シ→ソ→ミ→ド→ラ→♯ファ→♯レ→シ」と、すべて下行する３度の音程に還元されるなど、音を緻密に操作する技術は頂点に達しているが、ワーグナー派の急先鋒ヴォルフはこうした点をとらえ「無内容、空虚、偽善」「何の着想もなく作曲する技術はブラームスにその代表者を見出した。」と痛烈な批判を浴びせた。マーラーも「空虚な音の桟敷」と批判的にとらえていたようだが、一方、初演の際にトライアングルを担当したR.シュトラウスは「とてつもない楽想、そして創造力。大作としての形式や構造はまさに天才的」と書き残している。

第１楽章：ソナタ形式。緻密に構成された溜息のようなモチーフから緊張感のある楽想が紡がれる。

第２楽章：展開部のないソナタ形式。ホルンがフリギア旋法で古風な主題を歌う落ち着きのある楽章。

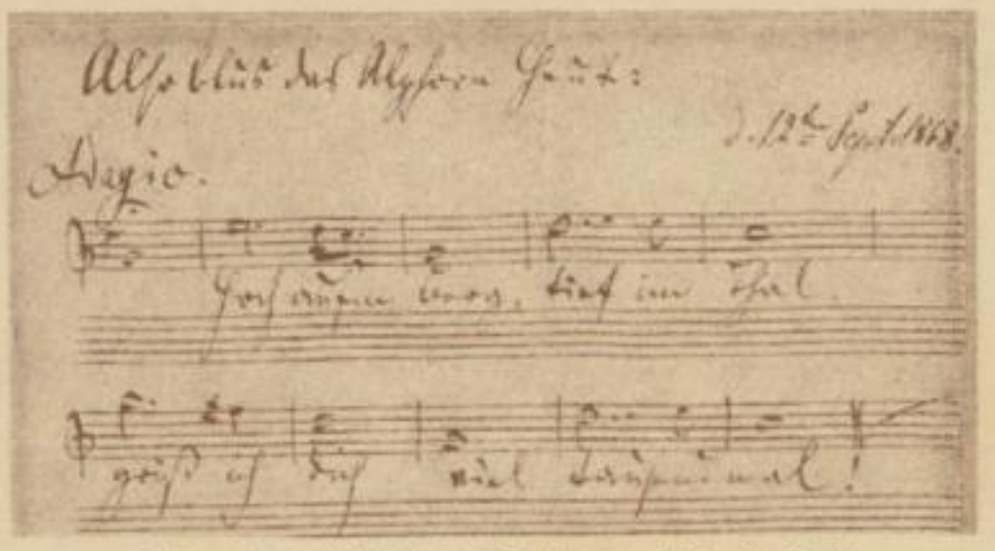
第３楽章：ソナタ形式。下行するハ長調の響きが明快で力強いスケルツォ的な性格の楽章。

第４楽章：パッサカリアの形式。30の変奏の中に晩年のブラームスの寂寥が吐露されるかのよう。

◆ブラームス：交響曲第１番 ハ短調 作品68

交響曲を創作する際にシューベルトなど同時代の作曲家が、ベートーヴェンの存在を意識せざるを得なかったように、少しあとに生まれたブラームスにとってもベートーヴェンの存在は大きな重圧となった。これはブラームスに限らず他の作曲家にとっても同様で、1850年シューマンが交響曲第３番を作曲してから1876年にブラームスが交響曲第１番を完成させるまで、実に26年もの間、主だった交響曲が生まれなかったという事実が「ベートーヴェンの呪縛」とも言うべきこうした状況を物語っている。ブラームスは交響曲以前に、ピアノや室内楽、そして「ドイツ・レクイエム」の成功により、既に作曲家として名声を確立しており「交響曲で失敗する訳にはいかない」という思いがいっそう強くなったのは想像に難くない。

着想から20年におよぶ歳月を費やし43歳のブラームスが発表した交響曲第１番は、ハンス・フォン・ビューローなど当時の高名な音楽家らから「ベートーヴェンの第10交響曲」と歓呼して迎えられ大成功をおさめた。均整のとれた調性配置や主題の緻密な展開、ハ短調（苦悩）からハ長調（歓喜）へという構成など、ベートーヴェンの影響がありありと感じられ、その意味では古典的な枠組みを持つ保守的な交響曲ということができる。しかし、音の動きをつぶさにみると臨時記号の大胆な使用や半音階的な旋律など、ロマン派ならではの豊かな情感がそこかしこに聴こえてくる。また第４楽章の序奏の後半で鳴り響くホルンの旋律は、ブラームスが数年前にクララ・シューマンの誕生日に贈ったメロディーであり、そこには次のような歌詞が付けられている。「“Hoch auf'm Berg, tief im Tal, grüß ich dich viel tausendmal” 高い山から、深い谷から、君に何千回もの挨拶を贈ります。」アルペンホルンの調べにのせて愛する女性に贈ったメッセージを、交響曲にそっと忍び込ませる。自分自身の情感や自然への憧憬を大切にする、そんな姿勢こそブラームスのロマン主義者たるゆえんと言えるかも知れない。



ブラームスがクララの誕生日に贈った旋律

第１楽章：ソナタ形式。ティンパニの連打で導入される重厚な序奏のあと堂々たる楽想が展開する。

第２楽章：三部形式。穏やかな緩徐楽章。後半に美しいヴァイオリン・ソロが登場する。

第３楽章：三部形式。間奏曲風の優美な楽章。中間部に「運命の動機」が現れ劇的な表情をみせる。

第４楽章：展開部のないソナタ形式。重々しい序奏のあとハ長調に転じ堂々たるフィナーレを迎える。

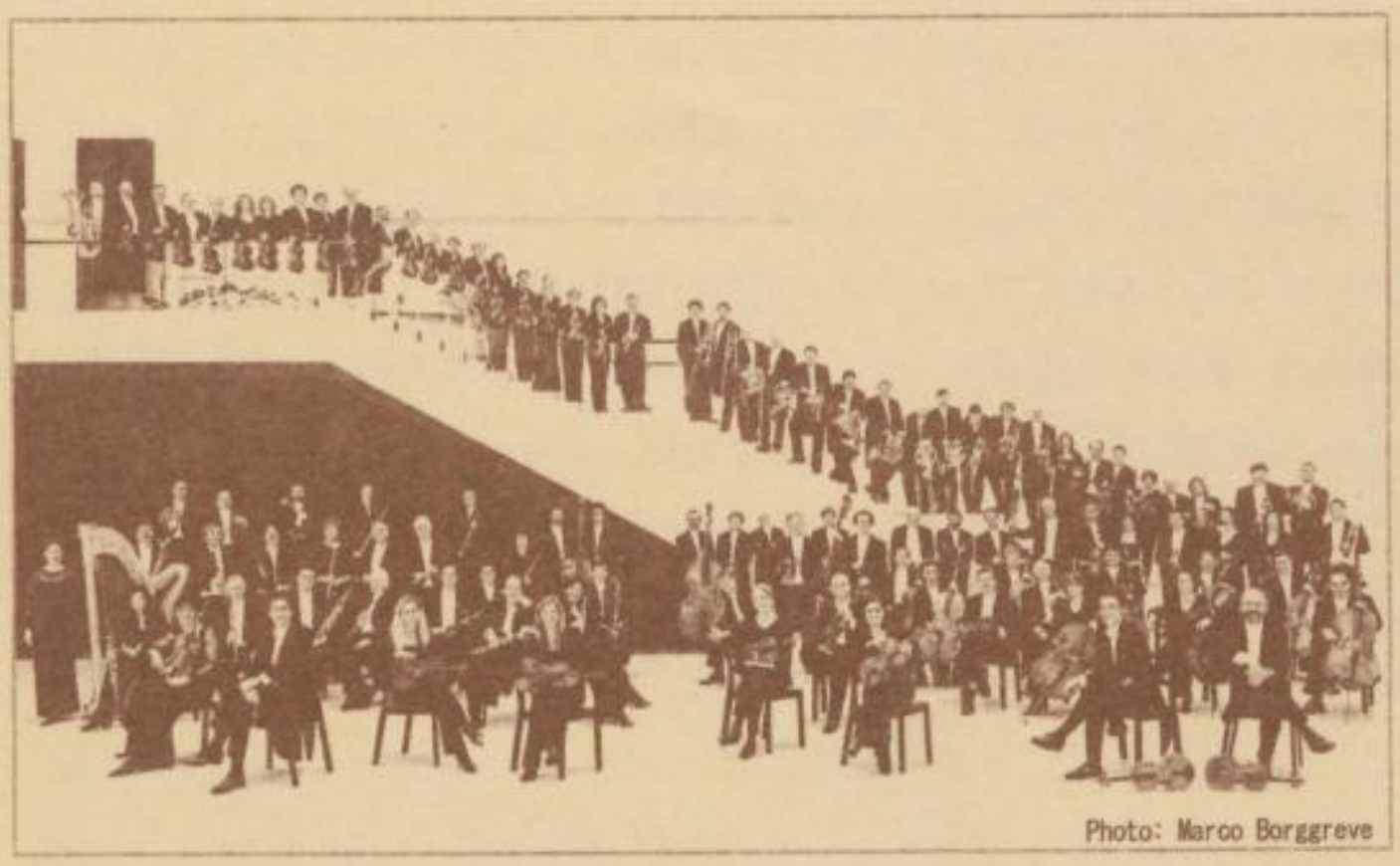
SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie

Profile

ミヒャエル・ザンデルリンク［首席指揮者］ Michael Sanderling, Principal Conductor

2011年からドレスデン・フィルの首席指揮者を務める、いまドイツで最も注目をあつめる気鋭の指揮者で、20世紀最大の巨匠のひとりクルト・ザンデルリンクを父に持つ。幼いころからチェロを学び、わずか19歳でマズアに認められ、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の首席チェロ奏者に迎えられた。その後、ベルリン放送交響楽団の首席チェロ奏者として長年活動した。
2001年に指揮者としての活動を開始すると、瞬く間に評価を高めチューリッヒ・トーンハレ管、バイエルン放響、ベルリン・コンツェルトハウス管、シュトゥットガルト放響、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団などドイツ内外の一流オケと頻繁に共演し、ドイツ音楽界を担う気鋭の指揮者として各地で絶賛を博している。近年では手兵ドレスデン・フィルとの充実した定期演奏会に加え、ミュンヘン・フィル、フィルハーモニア管、ケルン放送響などへ客演、日本でも読響、N響、都響に相次いで登場するなど最も期待される指揮者のひとりに数えられている。

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団 Dresdner Philharmonie



2011年よりミヒャエル・ザンデルリンクが首席指揮者を務めるドイツ屈指の歴史と伝統を誇るオーケストラ。その起源は15世紀にまでさかのぼり、宮廷から独立した市の音楽振興事業として発展した。1870年にドレスデンに初めて市民のためのコンサートホールが建設されたのを機にオーケストラが創設され、その後1915年に正式名称を「ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団」とした。140年を超える歴史と伝統を誇り、ニキシュ、E.クライバー、カイルベルト、クナッパーツブッシュ、アーベントロートらの歴史的な巨匠たちと演奏を重ねてきている。また、ブラームス、チャイコフスキー、ドヴォルジャーク、R.シュトラウスといった大作曲家が自作を同オーケストラと演奏してきたことも伝統の豊かさを物語っている。
マズア、ケーゲル、ブラッソン、ヤノフスキ、フリューベック・デ・ブルゴスらの歴代の首席指揮者からその地位を引継いだミヒャエル・ザンデルリンクは、早くも楽団員の心をつかみ名門オーケストラと呼ぶにふさわしい名演奏を繰り広げ、2015年の日本ツアーでも旋風を巻き起こした。

SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie